

今回は、吉沢久子「人間、最後はひとり」さくら舎より「人生を面白くするコツ」を紹介します。

たとえば、一泊二日の旅行が決まったとき「そんなに短いと、どこもまわれない」とグチをいうのか、あるいは短い旅でも行けると決まったら「やったあ」と張り切って旅の準備にかかるのか、ここが人生をおもしろくするかどうかの分かれ目だといえるかもしれません。ささいなことでもたのしめる知恵をもった人を、私は「たのしみ上手」と呼んでいます。この例でいえば、後者のたのしみ上手の人は、旅の前にいろいろと調べるので、そこから知識も増えて、好奇心がいやがうえにも高まり、旅先でもさまざまな発見があることでしょう。かたや、たのしむことを放棄してしぶしぶ旅に出た人は、何を見ても興味がわからず、時間だけがたって心も体も消耗するばかり。同じ旅でも、その質がまったく違ってきます。

とくに年をとったら、人生をたのしむことがいちばん。どのみち、もうすべてを請け負う体力も気力もないのですから、嫌なことは放っておいてもよいのではないのでしょうか。とはいえ、世の中にたのしいことなんてそう転がっているものではありません。だから、たのしみを自分でつくるのです。それはゼロから何かを生み出すということではなくていい。肝心なのは目の前のことをたのしいと思えるかどうか。そういった意味でも、いろいろなものに興味をもつことは有効です。たとえば編みものが好きな人は、それが嫌いな人の知らない快樂を知っています。関心を寄せる対象が多いほど、人生をたのしむチャンスは多くなるともいえるでしょう。また、あれもしたい、これもしたいという好奇心があると、ごく若々しく生きられる。とくに女性は、たのしく生きる知恵をもたなければ損だと私は思っています。

人間、生まれたときもひとりならこの世から去るときもひとり。しかしつい、人間は一人一人が自立した個の「ひとり」であることを忘れてしまう。いつも、まわりに家族や友人仕事仲間がいるから、つい間違えてしまう。何かあったとき人やまわりのせいにするのがそれだ。最近楽しいことがない、などとまわりにグチをいう。しかし、人生において何かおもしろいことや楽しいことが向こうからひとりにてやってくる、などということはまずない。たのしもうにしている人は、自ら努力してそうしている。たのしみは自分でつくっていくもの。目の前のさもないできごとをおもしろがれるか、つまらなく感じるか、で人生は変わる。

「たのしみ上手」人生を、おもしろおかしく暮らしたい

Q 1 : ささいなことでもたのしめる知恵をもった人を何と呼びますか？

A 1 : ( )

Q 2 : 人生を楽しくするために意識している事はありますか？

A 2 : ( )